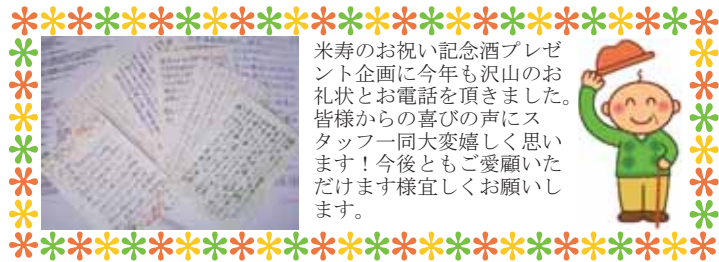


お酒の NEWS



米寿のお祝い記念酒プレゼント企画に今年も沢山のお礼状とお電話を頂きました。皆様からの喜びの声にスタッフ一同大変嬉しく思います！今後ともご愛顧いただけます様宜しくお願いします。



初しぼり「こり本醸造生酒」

1.8L 2,100円
720ml 1,050円

初しぼり純米吟醸生酒

1.8L 2,625円
720ml 1,313円

純米吟醸「雪」よみ「生酒」

1.8L 2,835円
720ml 1,418円

初しぼり生酒
12月16日発売予定！

秋の収穫も終わり、新米が蔵に入り始め、精米所はフル回転を始めた。今年も気合充分のスタートです。今年も最初に生み出される初しぼりにご期待下さい！

日本酒度	±0 ~ +2.0
酸度	1.3 ~ 1.5
アミノ酸	0.9 ~ 1.1
使用酵母	自社保存株
アルコール分	16.0 ~ 16.9
精米歩合	40%
原料米	天寿酒米研究会 契約栽培米 秋田酒こまち 100%

10月25日発売

1.8L 7,350円(税込)
720ml 3,675円(税込)



純米大吟醸「天寿」
リニユール

この度、純米大吟醸の720ml詰が金色の房紐付きで見ても高級感あふれる桐箱入り「リニユール」に生まれ変わった。霊峰鳥海山の万年雪から生まれる伏流水を仕込みに天寿酒米研究会「栽培米」秋田酒こまちを使用し、蔵人の匠と情熱が醸し上げた芳醇な香りと繊細でやわらかな味わいの純米大吟醸です。お祝い事や贈り物にも是非ご利用ください！

◎西武百貨店池袋本店
11/10(水) ~ 16(火)

◎西武百貨店池袋本店
11/9(火) ~ 16(火)

◎さとう横浜店
11/9(火) ~ 16(火)

地下一階酒売り場にて、試飲即売会を開催いたします。9日は、営業の佐藤博輝が、10日・12日・13日は常務の大井仁史が売り場に立ちます。大吟醸「鳥海」を始め、ご贈答におすすめの商品を各種取り揃えて、皆様のお越しを心よりお待ちしております。

どちらの会場も天寿の試飲即売会は年内最後となりますので、お近くにお越しの際は、是非お立ち寄りください。

【試飲即売会】



天寿の歴史

補遺 - 6

補遺 - 6
初代永吉 - 大井屋 六代目 大井永吉

初代については、戸籍制度以前の人であり、何故か家の過去帳にも載っておらず、「天寿の歴史」を書き出した頃の資料として、本家五代目大井光晴氏から頂戴した一幅の掛軸の裏書に大井栄吉の名（後に永吉としたと思われる）を見るのみであった。（一五） - 4に前出

その後、本家現在の当主大井益二氏から「栄吉婚礼祝儀帳」のコピーを頂いた。年号は文政五年（一八二一年）三月六日、内容は結婚式案内者と手伝人の名、頂戴したご祝儀の控えだけで係累との関係は明らかにならなかった。

初代が分家した年は天保元年（一八三〇年）だから、妻帯してからも九年の間本家に奉公（当時本家が営んでいた酒造りの仕事と思われる）の後分家となり、身につけた技術で糶と濁酒の商売を始めたと思像される。

最近お寺の過去帳を調べてもらったら、嘉永四年（一八五一年）四月七日深信院常正日園居士 - 大井屋栄吉こと - とあり、大井屋の屋号であった事が判明した。二代

目（正助）が婿入りしたのが嘉永二年（一八四九年）なので、後継者の婿を迎えてその二年後には他界したことになる。戒名から推して信心深い真面目な人柄であったと想像される。

前述の掛軸について説明を加えたい。江戸時代後期の儒者中井乾齋の書になる漢詩だが、我が家にとつては、その裏書により文化的にも歴史的にも貴重な資料となった。

裏書には、漢文で「余は常々、須貝太郎左衛門（盛倍）、武田喜惣右衛門（成斎）、和田常吉（松撤）、大井金治（享斎）、小沼弥八郎の輩と、出街の小流に架かる橋の南にある耕文堂（主人は美髯三浦和助）に小集し、共に詩を賦し百余首に及んだ。それを一小冊にするべく東都の乾齋先生に選をお願いしたが、先生の傑作者の選に拙作も亦入った」とあり、入選した「初冬夜坐」の漢詩が書かれてあり、その自作の詩を先生に揮毫してもらったのがこの一幅であることが判った。

更には「文政第十三年改元天保元庚寅秋八月十有六日分家して新街（現新町）における栄吉に、天保四年癸巳春三月三日需に應じて床前掛一幅」とあり即吟で享斎と



五代目大井光晴氏より頂戴した掛軸の裏書

圭齋（本人）の詩が添えられている。

即日 圭齋大井光晴感卿 授与 大井栄吉

上巳 即日即吟

三天气好 群賢喫飲醺
桃花流岸艶 蘭竹席頭熏
金樽倍雅興 玉菱促詩文
莫道永和後 風流少右軍 享斎

佳節共催詩酒筵 李桃含笑媚春天
誰思此日永和會 擬得揮毫譜代賢 圭齋

光晴氏は若い頃江戸へ医者（修業）に赴いたが、父の死により志半ばで帰郷したという後に矢島藩の御用商人を勤めた傑物で、文学的素養も備わった人物であった。またその人物と共に詩を賦し語り合う多くの仲間がいたことに、当時の矢島知識人の文化度の高さを思うのである。